
戦国無双 甲斐の獅子

マサムネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国無双 甲斐の獅子

【Zマーク】

Z2376P

【作者名】

マサムネ

【あらすじ】

時は戦国時代、己が野望を果さん者、己が信じる者、愛する者のために命を賭けて熱く駆け抜けた時代である。この物語は甲斐の国の武田家で忠実では生まれるはずも無い武田信玄の子がこの戦国を駆け抜けた物語である。

序章（前書き）

初めましてマサムネと申します。何分始めて書く小説なので駄文になるかもしれません。ですが、自分が一つの青春のゲームを書くので頑張つていこうと思つたいたいのでよろしくをお願いします。お館方さま――――――――――――――――――――――――――――

俺は、今可笑しな状況に堕ちている。

他の周りは、田たけにモ一七無い真、時などこかにして体の自由も利かない

などと軽蔑のは考え方では行かない。しかし、かの「眼」が、この「見出

備はおもはす

なぜ俺は赤ん坊の声を出しているんだ？

「まあ、あのひとそつくりで立派そうな子だはー」

誰この優しそうで綺麗な女の人は。
てか、デカツ！

などと考えていたが、俺は軽くそれを上回れてしまつた。

つ
て
い
た

「おややあああああああああ-〔なんじやうつや———.〕」

「紫音「シオン」よ生まれたかね！？」

「ああ、お前様ええ元気な男の子ですよ」

「おお、なんかすごくてダンディーな人だなー」でも、この声どこかで聞いた声なんだけど? そんなこと考えていたらお前様「?」がいきなり俺を抱えた。

「ほおれー父だ世ー」
などと、とてもそのダンディーに似合わず
満面の笑みで俺あやして
いた

「お前様早くその子に名前を授けてくださいな」
「おっ そうじゃった いやほやつこられしくてなーすつかり忘れ
てたわ

がつせせせせ

「この武田信玄の子で、これからお前の名は武田刹那となづけようぞ」
「おぎやああああああ！」「やつぱり―――！？」
「まあ、とつてもいい名ですは、これからよろしくね刹那」
「刹那よ、わし見たいにカツ」「よく育つのじやぞ」
「おぎやああああああ！」「まじで――――――――！？」
「そうこれがのちの伝説とし語られる甲斐の獅子の伝説の始まりであった。

序章（後書き）

まずは、すみません。何分始めて書いたもので、でも、これからいろいろがんばつていこうとおもつのでよろしくお願いします　あと、感想もできたらくださいお願いします。

次回は武田といえばあの2人がでできます。それでは次回はいつになるかわかりませんが
がんばつて書こうと思つておつます。では、さらばです。

第1章（前書き）

どうもーマサムネでーす 前回の告でいつてた二人の子供バージョンを出そうと思います。 また、一人無双武将を出そうと思います。 ただ、この方を出すといろいろ無視しているのでもし、それがダメな人はもどってください。 それでもいい人はどうぞ、ご覧ください 話は一気に8年後の話になります。

第1章

やあ、俺の名は武田刹那、なぜか分からぬが、あの武田信玄の息子としてこの戦国時代に生まれた。

ただ、この戦国が普通の戦国ではなく、あの「戦国無双」の世界だとは正直驚いた。

確かにこの世界に来る前に戦国無双のゲームやっていたがそう最近にいきなり、意識を失い

そして、気がついたら、赤ん坊でこの世界にいた。

だだ、おかしなことにこの武田家の息子は俺だけで、事実上の次期後継者になつた。

また、信玄の父、信虎は急死して、自動的に父上が武田をついでいた。

また、この時代では、今川とは同盟はしていなかつた。

また、俺が一番驚いたのは自分の体だつた。まず、最初に、3ヶ月で喋れるようになり、一足歩行もできるようになつていた。

その2年後には文字の読み書きをマスターした。それが巷に広まり、甲斐の麒麟児などといわれたのは記憶に新しいことだ。そんなことがあって8年の月日がたつた。

刹那「ん・・・んんん・・・

襖の隙間から入った朝日の光で目覚めようとしたが、腕に誰かに押さえられて身動き取れなかつた。

外見は頭はボーネールであり

顔と体はまだ、幼さがあるが、それでも、綺麗なほうである。

刹一鈴音「スズネ」おきる」と優しく声をかけた。

この人物は戦国無双では真田幸村の女忍「くのいち」である。なぜ、そんな子がいるのかと、この世界でのくのいちは真田の忍では無く、武田の忍の者であつたからであり。また、俺の護衛として俺が6歳でくのいちは3歳の時に出会つた。

最初は主君の息子だと、おずおずしていたが、だんだんとなつかれて、いつしょに遊んだりもしていた。そんなところを父上と母上は優しいめで見ていた。また、その時にお互いに自己紹介してそこで、くのいちの本名の「鈴音」としつた。

そんな説明をしていてる間に鎌音がおきた。

鈴音「ふあああああつセツナを一おせんぱいわこねす」

といつて鈴音の頭を優しく撫でた。

といいながら頬を赤らめてネギのよになついてきた。

刹「おひよしよし、つとこない鈴音なごりおしのですが、そろそろ起きな」と幸村「ユキムラ」と甲斐「カイ」ちゃんにおひらてし

三九

鈴「はー、もうでしたね〔本当はもうとしてほしかったんだけどね〕

/ / / / /

そんな残念そうな顔、俺は見過ぎます」となくすかさず耳元で

刹「また、あとで、いっぱいなでなでしてあげますよ」とフロモンボイスを囁いた。

ボン！－と音がして、鈴音の顔が真つ赤になり頭から湯気がでつていた。

俺はその後、服を着替え放心状態の鈴音を元に戻していしつしょに屋敷の門に向かつて行つた。

そして、門についた時に一人の少年少女がいた。
？？？「兄上およづございります。」

「ああ、『元氣屋』の『元氣』は、元氣屋の元氣だよ。」

まず、上からご存知「真田幸村」くんです。なぜ、幸村がを俺を兄と呼ぶとまず、真田家には、真田信之「サンダノブヨキ」とゆ兄がいるはずだが、この世界では何と幸村しか生まれていなかつたので

そして、武田・真田家との宴会のときに知り合ひながら、遊んだり、鍛錬などをして自然と俺のことを見上と呼ぶようになつた。なぜ、歳も近いどうしなのに俺を兄と呼ぶのかと聞いて見たら幸「なぜか、兄上と私は歳がつがいそうでなによつ、やせしつつて、かつこいいからです！」

んでいたそのあと画家の母たちによつて地獄のよつなお話をわれた。

ともあれこうして俺らは義兄弟となりまた、親友ともなれたのであ

る。

甲「刹那さま」めなせ「いね、」いん朝早くから「

刹一 大丈夫だよ、なてたつて、俺の大切な弟と女の子をわたせてしまったもうしわけないじゃないか〔笑顔〕」

甲「！？／＼／大切なんとそんなん／＼＼＼＼＼」といつて手を顔に

つけ腰を振つていた

次に甲斐姫ちやんのことについて説明しよう。まず、なんで甲斐姫がこの国いる理由は何と好都合的なことで甲斐姫の父成田氏長がなんど、うちの家臣であつたためである。まあーそれだけであるえわけではなかつたがある時に俺がプラーツと街にてたら甲斐姫がイジメられているところを俺が助けてそこから一寸惚れなことになつてたまにいつしょに街に出たりもしてまた、彼女がいじめに会いそくなときは

俺がそいつらをぶつ飛ばして いたそれからなのかとおもうが甲斐姫も鍛錬に参加するようになった。

そこで莘村と鎌齋としりあつたのである。ゲームをやつた身なので最初は鈴音と甲斐ひやんは中が悪かつたがまさか今でもとおもつていたがそんなこともなくお互い仲良くやつていた。

さて、2人の説明も終わったのでそろそろ甲斐ちゃんをもどしますか

「それより『兄上』一れか道場に鍛錬をしにこきましよひ、

刹「おっとそくだつた、あまり父上たち待たされるといけないな

よし！みんないで！

全「はい」「はーい」「はいなー」

そして俺たちは父上が待つ武田道場に向かつた。

第1章（後書き）

どーもでーす。いやー小説つてむずかしいですね。でもがんばりますので感想お願いします。あと次回はいつなるかわりませんがいよいよセツナくんの初戦闘を頑張って書こうとおものでそれではまた

|

第2章（前書き）

ども、マサムネです。今回は刹那くんがある無双武将と初戦闘をします。
初めて書くので、至らないところがあるかも知れませんが、どうぞ！

第2章

俺たち4人は、今、父上が待つ道場を田指しているが少し歩き難い、なぜかとゆうと、

「 」

「 」

まず、上から、上機嫌な鈴音、下は、恥ずかしいそうだがどこかうれしそうな甲斐ちゃんと俺の腕にしがみついていたかれである。

それを後ろで苦笑いしながら見ている幸村がいる。

鈴「やつぱり、セシナさまの体つて暖かいねー」

甲「そうね、この体の温もりは最高ね／＼／＼／＼

刹「よくわからんが、それで、お前たちが幸せであるのなら俺も幸せだ」

などと言つたら2人は顔を真っ赤にしながら俺にじやれてきた。

そんなことがありながら俺たちの目的地の躊躇ヶ崎館「つづじがさきやかた」についた。

その敷地内にあるひとときせデカイ寺が武田道場である。

その中に入ると、

信「おつー・刹那 それにみなもようめた

全「父上〔お館様〕×3」

中に父上が仮面をつけていた待っていた。

なぜ、仮面をつけているのかとゆうと鍛錬や戦の時は自分を引き締め為やかつこいいからだと前にいつてたのである。

信「それにしても、刹那は相変わらずモテモテじやなーハレで武田も安泰じや」

などと茶化してきて、言つてる意味が分かっているの鈴音甲斐ぢやんは真っ赤になつて、頭か湯氣が出いた。

刹「父上あまり一人で遊ばないでください」

信「イヤーすまんのう、なーに息子がワシ見たいにカツコよくて、将来美女になる者とイチャイチャしてついな」

などといつていると道場の入口から人が入ってきた。

? ? ? 「おや？ 信玄公にほっちゃんにじょちゃんたちじやねーかー

幸「あつ左近さん！」

幸村が今入ってきた人物の名を言つたやうの方は「島左近」最初は武田信玄のところで、軍略を学び そして、石田三成の家臣となりあの家康に関が原で「三成にすぎたるもの」と言わせて名武将だ。

なぜ、今の時点でいるのかとゆうと父上に軍略を学びにきたのはたしかあと俺の噂を聞いて此処に来た。そして、俺を見て「あんたは、信玄公を超える人だ」と言つてそのまま俺の配下になつた。つなりに、今の左近さんの歳は14歳で俺たちの兄貴分であり、

左近さんも俺と幸村はぼつちやんと呼んで、鈴音と甲斐ちやんはじゅぢやんと呼んだ「今の俺たちの歳は刹・8歳。幸・7歳。鈴・5歳。甲・6歳となっている」

刹『左近さん、どうしたんですか、メジウシいじやないですか、自分の「Hモ」を持ってきて?』

そうだ、なぜ、今、左近さんは自分の武器「斬轟一閃刀」を持ってきていた。

左「なにって、信玄公まだ、話してなかつたんですか?」

信「おつー、せうじやつた。刹那よお主も自分の武器は持ってきてるな?」

刹「はい、父上」「と俺は後ろの腰に納めてた剣を見せたその剣は左近さんが使う斬馬剣タイプで、また、デザインは「三国無双」でいたキャラ「関平」の第三武器の飛龍裂空刀とそのものだった。ただ、ちがうのは鞘の部分が龍ではなく獅子であること剣の部分が金色に輝いてるところからこの武器の名前は「獅子輝剣」「しきうけん」となづいた。

信「よし、これより、おぬしさの左近と真剣の一一本勝負をしてもらひ

刹「ほおつ、すでにきずこてか」

信「ほおつ、すでにきずこてか」

刹「最初に入ってきた左近さんの雰囲気が戦にする氣でそれに左近さんが武器をもつたとゆう」とはとても特別なことなどと考えたか

らですよ

そつこの生まれた時から俺たち4人は武田の試練を受けていてちょうど3人はもう試練は終わったが、俺だけまだつたのだ、

左「あはははは、信玄公これは一本とられましたな、それじゃそろそらやりますか」

刹「はい、わかりました。みな下がつていてくれ

幸「兄上がんばつてください！」

鈴「セツナさまガンバです」

甲「刹那さまぜつつたい勝つてください！」

3人に応援され俺は左近さんと向かいあう左近も自分のエモノを構えて俺も構えた。

信「それでは、始め！！」

父上の合図と、ともにまず、俺がいつきに踏み込んでいきに左近さんの頭上から振り下ろしてそれを左近さんが受け止めたその瞬間強い衝撃波が出た、そのままツバ競り合いになつてお互いいっぽも引かず引き分けとなりお互い少し離れてそのままこんどは激しい打ち合いになつた道場に響く鋼と鋼がぶつかりあう音、俺は時に攻めたり、時に守つたりしながら打ち合いをした。そして、左近さんのこゝ身の一太刀を防御して吹つ飛ばされた。そこで、俺は剣を逆手に持つて後ろに構えた。

左「ほう、おもしろい、かもえですね」

刹「ええ、これが、本来の俺の戦い方です。これからは全力でいき

ます！」

その瞬間、俺は本気になつたとたん体から「氣」があふれでてきた。

左「…！「すげ、こんな小さな子がだすものじやないぜ」あの「氣」は「こっちも本氣でいかないとなー」

と左近さんも本気になりお互い「こん身の一撃で勝負を決めようとしていた。

そして、剎那が一瞬で消えその消えた途端に左近さんが一気に剣を振りおろしてその瞬間に道場内が強い光に包まれて辺りが何もみえなくなつた。

信「おつ…コレは…」

幸「何も見えない！」

鈴「眩しい…！」

甲「何が起きたんだい！？」

そう、みながゆつた、そして、光が無くなりあたりが見えるようなると二人立っていたが左近は自分の武器が床に刺さつてた。対する剎那は少し服を切られたがそれ以外はなんとも無く威風堂々とたつていた。

信「それまでー！」の勝負剎那の勝ちじゃ！」

左『イヤーまいました。ほっちゃんはたいしたお人だ』

刹「イヤーこちらも紙一重でした。ありがとうございました。」

信「剣那よ、おもでとつゝれでお！」と武田試練は立候、じや「これからも励むのじゃぞ」

剣「はーー・父上」

幸「兄上…おもでとつゝれ…兄上…？額か血が…」

鈴「ええええーーはつは卑くてあておしなこと」

剣「大丈夫だよ、こんなものすぐ止まんな」

甲「大丈夫じゃないですよーーそんなこと病気に何たらびつかるですかーーをあ早く手当てしましょーー」

剣「わつわかつたからみんなに卑くひつぱんないでーーー」

そのあと俺は一人に心配せてしまつたのでそのおあびとして2人とトークをするとなつたと。

第2章（後書き）

イヤー小説こんなに難しいけどこんなに面白いものは知りませんでしたよ、さて初戦闘はどうだったでしょうか何部初めてだったのでこれから頑張っていこうと思います。次回はまたもや時間は飛びます。たぶん今度は刹那くんたちの初合戦を書きたいとおもっています。まだいつできるかわかりませんが、なるべく早く書こうと思っています。それではまたまた。

第3章（前書き）

おひたです。マサムネです。 今回は前回の話から進んで刹那くんたちが子供時代から、青年時代になって、そして、初合戦の話です。あと合戦ナでけどオリジナルな合戦でかつ初めて書いたのでできらでけメインたちを活躍させますのまた、前半・後半と分けて書きます。では、どうぞ！

あの、最終試練から時は流れ俺たちは子供から青年えと変わっていた。

その時から甲斐では嵐の予感が渦まいてた。

この「」は甲斐はまだ統一されず今は武田家対武田によって倒された家が結集した反武田連合の2分されていて
だが、いま膠着状態だつたが父上がついに甲斐統一に動いた。これが俺たちの初陣となつた。

「」は武田・反武田の絶対境界線であり反武田は「高遠城」を防衛拠点としあちからこれを決着にするのか戦力を集結してた。

対す武田は「躰躰ヶ崎館」から出陣して境界線の「」に布陣した。

『武田本陣』

今、俺は幸村と対峙している。ちなみに、幸村の様態は「戦国無双3」の格好と同じである。ただ武器が「戦国無双2」であった「紅牙飛燕」を使つている。

対す俺は格好は下に黒いシャツで上に半袖の赤いジャケットを着てその背中には金色で刺繡された。獅子の絵があり、また、ズボンは黒で長いヤツで横に金色のラインがあり、腕には金色の籠手をする。そして白のハンドグローブ「指先なし」のヤツを手につけてまた、コレにも金色の獅子の顔が両方に描いてあつた。そして、武

器は『獅子光剣』ではなく、している人は分かると思うが「侍戦隊シンケンジャー」でシンケンジャーたちがメインで使ってた武器「シンケン丸」を少し長刀に近いかつ、刃がシルバーじゃなく、金色となってる。この剣の名前は「シシ丸」となづけた。「シシ丸」の能力については、またあとで語ろ。

ともあれ、俺たちはお互ひの武器を構え合つたいた。

刹「…………

幸「…………

最初に動いたのは幸村だった。

幸『ハツ！』

幸村の鋭い突きが俺に向かう、それを俺は最小限の動きで払いのけ逆にそのまま俺も突き返した。

幸「クツ！」

すかさず幸村は後ろにジャンプし後ろに飛び着地したら、すかさず間合いをつめつて右上から振り下ろした。それを俺は。

刹「あまい！」と言いながら止めた。そして、それを払いのけた。

幸「まだまだ！　はあいはあいはあいはあいはあい……」と今度は田にも止まらない速さの突きを繰り出した。

俺は、それを巧みに避けて幸村の一瞬を突き、電光石火のごとく「シシ丸」で「紅牙飛燕」を吹っ飛ばした。

幸「あつ！？」くつ」と「シシ丸を幸村の首に剣の先をつけた。

刹「勝負あつたかな？」

幸「はい、負けました。やつぱり兄上はお強いですね」

刹「まあな　しかし、幸村もなかなか槍に強みと鋭さそれに、魂が感じてきたよ」

幸「ありがとうございます。しかし、兄上はすごいです。私はすごく動いていたのに兄上は今の位置からそれほど動いていないじゃないですか」

と幸村は俺のすゝみに田をキラキラさせていた。そのとうりなのだ。
さつきの試合で俺は突きをしたいがいではいまの位置を動いていな
かつたのだ。

刹「鈴音帰つて来たか」

鈴「はーい もう刹那さま私が氣ずかないように氣配を消して後ろから抱き着いて驚かそうとおまつたのに」と後ろを見ると後ろに鈴音がいた。様態は「戦国無双3」へのいちの格好と同じでただ違うところがあつて、それはゲームだと胸がBカップだったがここではCカップで無双武将「ねね」くらいあるのだ。そんなこと説明していると鈴音が不満そうにホッペをふくらましてた。

刹「ごめんな、鈴音、おまびに私が抱きしめてあげましょ」といつて腕を開いた。

は優しく抱きしめた。

刹「そうか、それは、よかつたです。それで鈴音、首尾はどうでした。」

鈴「あつ　はい、敵の戦力、陣容、敵武将・兵糧庫、あと、城への
隠し道を見つけました」

刹「そうか、でかしたぞ！「ナデナデ」」

鈴音には敵の偵察と城への隠し道を探してもらつてた。
俺が鈴音を撫でていると
そして、

甲「アア―――!? するい―――!! 刹那様あたしにもしてください
さいよ／＼／＼」

「3」と同じである。

しかし、彼の一人はよく抱きつきそして、胸もなすりつけるようにしてくる。

俺だって2人の好意はきずいてる。どこぞ、鈍感天然女タラシの主人公ではないだが、やはり、これは、恥ずかしいが、俺は、人前のときではそういう恥かしい仕草を顔をに出さないようにしている。

刹「すまない。やつこへば、田嶽ちゃんが来たとゆうことで軍議かい？」

甲「あつはいお館様が軍議があるから読んできてくれと頼まれまし
た」

と俺から降りて軍議があるとつたえた。

刹「ありがとうございます〔あとで〕のつめ金をせわするから」

甲「!/?」/ / / / / / / / /

田斐ちやんお礼をゆうため鈴音を離してお礼を言つて耳もとでつめ合わせのこと囁いた。

そして、みんなで、本陣に向かつた。

刹「父上ただいま、まいりました」

信「おおー来たか刹那それにみなも
本陣に入ると中央に大きい長い木のテーブルがありそこにはこの戦
の地形が描かれてる地図がある
そしてテーブルの先頭に父上がいて、父上から見て右側に昌幸さん、
左近さんがいた。

そして、俺たちは父上から見て左側に横一列に座った。

信「さて、みなそろつたことだし、これより軍議をおこなつ。まあ、敵の様子はどうか?」

鈴「はい、敵は城に籠らず城の外で主力が陣を張つており、陣容は無形で主な敵武将はあまり目ぼしい人物はいません。おもに重要な武将は総大将の諏訪頼隆「すわりたか」ぐらいです。あと兵の数

はこちらの倍の1万でしかし、団結力は我が軍より劣っています。
兵糧庫は城の中にありました。」

信「うむ、じくわいであった。鈴音」

鈴「ハア ありがとうございます。」

信「さて、ここまでば、剣那の読みどりじやな」

剣「はい、今頃、別働隊が上田城を田指してゐるといふでしょ。」

俺はまず、忍による情報活動を強化した。戦で一番力になるのは数では無く情報が戦を制するのであり

また、この戦のために反武田に偽の武田軍の大軍勢せるとゆう情報を探し、まあと引きかかり敵軍は、はまり自国の持てる戦力を終結させて他の城は手薄になり別働隊が手薄な上田城を取るそうゆう策である、また、この策を成功させるために父上と俺と主力の武将がいるとなれば敵はこれほどの大手にくいつかないはずがないと思ひ自らをおとりとした。

左「さすがは若ですが大胆不敵でかつこの一戦で甲斐統一を果たそうとしてるですから」

と左近さんがいつたちなみにこいついた軍関係のことになると左近さんは俺のことを「若」と呼んでいる。

剣「そりやそりですよ、こんなことで足止めされてたら先に進めませんからね」

そしたら左近さんが「ハアハハハそりやそりだ」笑つてこたえた。

剣「とりあえず俺たち主力が正面で敵できるだけ城からとづきかけ

て、そして信幸さんの隊が鈴音が見つけた隠し道を使って城に奇襲して、城を取りそのまま後ろから敵を突くそのため、こちらの陣形は最初は鶴翼の陣で防御して城が落ちたら、陣を魚鱗の陣で攻めるで、よろしでしょか」とみなに聞いてみなは無言で頷いてくれた。父上が、

信「うむ、あいわかった。みなにあらためてゆづがこの一戦で甲斐統一を果たすみなこころしてかかるじゃぞ!」

全「「「ハツ……」「」」

信「それから、刹那・幸村・鈴音・甲斐姫よ、おことじらせこれが初陣じや、じやが無理はするなここと死に急ぐことわゆるさんかならずい帰つて来いよいな」

刹・幸・鈴・甲「はい!父上「お館様」×3」

信「では、これにて軍議を終わる。みな準備にかれ!」

全「「「ハアー」「」「」「」

こうして俺たちの初陣が始まり、また、この戦いは「高遠城の戦い」と呼ばれ俺に「甲斐の獅子」と呼ばれることになるた戦いになった。
・・・・後半へ

第3章（後書き）

イヤー／＼の／＼いちと甲斐姫つてカワイイですよね。 次回ですが後半で初合戦を書きます。あと鈴音「くのいち」の様態をかえましたがもし、これを見て「こんなのくのいぢじやねーー」と思つてしまつたら申し訳ありません。また、次の話で文字力を出そうと思つております。

ちなみに、初めて出た陣形の効果は「戦国無双2 Empires」と同じ効果が出るようになつております。最後に今、学校が忙しいのでこの小説の更新が遅くなるかもしませんが、なるべく早く後半を書けるよう頑張ります。では、また、さらばです。

第3章 後編（前書き）

おひやです。マサムネです。やつと学校の実習がひと段落しました。
今日はいよいよ初戦うまく書けるようがんばります。戦場は本編
で書きます。では、じつね！

第3章 後編

軍儀が終わり、俺たちは、自分たちの部隊に向つた。俺たちの軍の戦力は7000で出陣したのち2000が別働隊で上田を目指して今は5000になつていて。敵は、その倍の10000となつている。

だが、団結力がない軍など恐れにあらずである。

そして、俺たちの部隊が待つところに着いた。

俺たちの部隊構成はまず、全体での兵力が1000で司令官が俺で幸村・鈴音・甲斐姫は副将である。

まず、配置だが、本隊の俺中心にまず、右に幸村の槍隊が、200人 左に甲斐姫の歩兵隊これも200人

そして、後ろに鈴音の弓矢隊が100人ちなみにこの弓矢隊の100人の内30人が忍で鈴音の部下であり

状況によって、偵察・工作・伝令などをさせることもできる。

そして、部隊の皆に集まるよう指示し俺を中心に左に幸村、右に甲斐姫・鈴音と並んでいた。

俺は部隊の皆に号令を掛けた。

刹「みんなも、これより我が軍は反武田勢との決戦であり、また、我が隊の初陣である。

だが、敵は団結力も無い言わば「カス」であるり、しかも、数に任せて攻めてく鳥合の集団である。

だから、この戦で力に任せた戦術が以下に脆いかを刻みこみ、我が隊の勝利を飾るのではないか！！

部「「「「「「オオ！…」」」」」

刹「そして、もう一つ皆に約束してほしいことがある、それは誰一人欠けることなく生きてともに

勝利の酒を飲もうではないか――――――――――――――――

全『『『『『『オオ――――――』』』』』

刹「では、みんなのもの、準備にかれ！…」と号令をかけ皆は準備にかかりた。

幸「おみごとでした。兄上」と声を掛けてきた幸村

刹「ありがとうございます、さて、俺たちも準備にかかる まず、今回の戦は昌幸さんの隊が城を迅速に落とせるかどうかで、戦がきまる」

つなみに、戦場は広い草原が広がりそして、城は小さい山の上にある。

そして、我が軍の準備も完了し本陣から出陣した。

敵は情報どうり無形陣であった。俺たちは策どうり、鶴翼の陣を形成した。

刹「よいか。別働隊が城を落とし背後から、敵を突くそれまで、敵の手をこちらに向ける！」

幸村！甲斐姫！「戦や政の時はちゃんとすけしないのである。」

幸・甲「ハツ！」

刹「お前たちは、鈴音の『矢隊の一斉射後に敵の先方を叩け！鈴音も頼むぞ！』

幸・甲・鈴「ハツ！！」

部「敵、きました！」

刹「よし、いくぞ、敵に俺たちの力を見せ付けるぞーー！」

全「『オオオオオオツ—————』」「」

鈴「『矢隊のみんなさん——いまから』矢の一斉射をかけます。目標は敵前線！構え！ 打て————！」

鈴音の号令を合図に多くの矢が放たれ、敵の鼻先をかすめた。

幸「よし、敵は勢いをなくした。これより、敵に攻撃を掛ける。敵の田を一いち方に向けるぞー！」

甲「あたいたちも、いくよ！着いてきなさいー！」

幸村と甲斐姫の部隊が敵に向かいそして、両軍が激突し、そのまま乱戦となつた。

幸「我こそ、武田刹那の家臣 真田幸村！恐れを知らぬものはかかるまい！」

甲「同じく、甲斐姫！女だからってあまく見るといいたいめにあるよ

！」

といい敵に突っ込んでいった。

幸「ハツ！」

幸村の槍が敵を一人、二人と切り裂く

敵「なにをしている！？ 囲んで追い込め！」

敵は幸村を囲むだが、

幸「燃えよ我が魂の炎よ！－！」と言つたら槍の刃の方に「炎」と文字が宿り炎が刃からでて、敵はおどろいていた。それを見逃さない幸村は

幸「セイヤー－－－－－！」

槍を囲んでる敵に振りかざし吹つ飛ばした。不思議なことに炎は敵を焼き尽くしたが近くの味方や草などに火が点くことは無かつた。
甲「ハア－－－」甲斐姫も自分が愛用する鞭剣「水竜之薄金揆」「すいりゅうのうすかねこしらえ」を鞭に使い敵を薙ぎ払つてた。

甲「これで、頭を冷やしなさい！－！」と敵に苦戦する味方に向つて剣に「水」と文字が宿り地面に突き刺すと周囲から水柱が出て敵を吹き飛ばした。また、これも不思議なこと味方には被害は無かつた。

刹「幸村と甲斐ちゃんの「文字力」上達したな」と関心していた。

知つている人は知つてるだろ？ 文字力とは『侍戦隊シンケンジャー』であった。シンケンジャーの源いえる力である。なぜ幸村たちが使えるのかは、もともとこの世界の人間の中に文字力はあったの

だが、それを引き出すことは難しいとされていたが俺にもここに来た時に文字力をもつておりその力を十分に發揮できたのである。また、幸村たちができた理由としては、俺が教えたと簡単に言つておこう。

さて、戦況は策道理進み敵の先方は潰され敵の日をこちらに向けることができた。

そして、城を見て見ると煙が上がっていた。と鈴音が来て
鈴「刹那様 昌幸様の部隊が城を落としこれから、背後がせめるそ
うです。」

刹「わかつた。ならば、こちらも攻めて一気に決着をつける。鈴音、
みなに伝令をだせ』

鈴「はい！わかりました」と鈴音が消えて俺は部隊の皆さんに号令をかけた。

刹「これより、我が軍は鶴翼の陣を止め魚鱗の陣で敵の攻めるよ
う俺に続け――！」

俺は「獅子輝剣」を腰から抜き一気に敵、目掛けて突っ込んだ。敵
も俺に気がついたが、急に現れた鈴音

鈴「よーし、お仕事しますか、ニヤハ」と一本のクナイ「烈風円
旋刃」「れっぷうえんせんじん」

「風」の文字力が宿り、ジグザグに移動しながらクナイで攻撃した。
その風はかまいたちとなつて、
敵を切り裂いた。

刹「吼えろ我が獅子の心よ！」と「獅」とゆう文字が剣に宿り剣が
黄金色に輝いた。そして、俺は一気にジャンプし上空から獅子輝剣
を振りかざした。

刹「セイヤー————！」

地面に剣を叩いた瞬間に今いるところから周りにいた多くの敵が一
瞬で吹っ飛ばされた。

俺は休む暇も無く、敵に向つた。最初に目に入つた敵を斬り、その
横から来た刀を刀ごと敵をぶつた斬つた。尚を俺は止まらず敵の攻
撃を避けたり、受け流し、時には前後から来た攻撃をジャンプして
避けた。相打ちさせたり、敵を斬つたり、ぶつ飛ばしたりして、敵
を薙ぎ払つていた。

その後ろでは幸村・鈴音・甲斐姫・左近の部隊が攻めていた。そし
て、昌幸の別働隊も背後から敵を突いた。敵は退路を絶たれた俺
は一気に敵本陣へと突き進んだ。

刹「敵大将と見た！」

諭「なに、ヤツだ！」

刹「某、武田軍が將、武田刹那！その首を取つてこの戦を終わらせ
ます。」

諭「なに！？ 貴様あの信玄の小童かそう簡単に首はやらん」と槍
を突いたが俺は冷静に防御して、
その最に槍の刃が折れた。

諭「なに！？」

そして、俺は一氣にまわいをつめて、諭訪を斬つた。一瞬なにが

起きたの分からず、諏訪の胸が血が拭きだして絶命した。

刹『敵總大將は、この武田刹那が打討ち取つた。――――！』

この瞬間にこの戦が俺たちの一勝利とゆう形で終わつた。

信「みな、よくやつたなあ」

本陣で皆が集まつていた。最近入つてた情報では、上田に向つた部隊もなんも被害も無く上田城を落とした。あとこつちの戦の結果は敵の死傷者は3000人 こちらの被害は100人弱であった。また、俺の部隊の被害はケガ人がでたが再起不能の者や死者は奇跡的にでなかつた。

刹「父上、甲斐統一おめでとうございます」

信「うむ、刹那たちも初陣は輝かしい活躍だったときくみなよくがんばった」

刹・幸・鈴・甲「「「「ありがとうございます」」」」

信「今日はささやかだが宴を模様した。今日は無礼講じや飲みまく
れ——！」

そして、宴が始まつた。俺は幸村と飲んでいた。

幸「兄上お疲れ様でした。」

刹「ああ、幸村もがんばったな
文字力も大分モノにしたな」

幸「ありがと「ハ」ヤモです。これも、兄上のおかげです。」

刹「気にするな、たしかに教えたのは俺だが、結局はお前たちの力でモノにしたんだ。誇つてもいいことだ。」と言つと幸村は照れていた。

幸「ありがと「ハ」ヤモです。兄上／＼／＼ わづこえば、戦いの中、敵が兄上に向つてこんなこと言つていきました」

刹「うん? なんと言つたんだ」

幸「「俺たちは今「獅子」と戦つているんだ」とこつてました。」

刹那「なるほど戦場で戦つてる姿と格好・武器でわづ思つたんだらうなかなか面白っこ」と言つ奴もいるんだな」

幸「そうですね。兄上」

幸村と話していたら

鈴音「セツナしゃま――――――――と顔真っ赤にした。鈴音が来て俺に抱きついた。

刹「おつと、鈴音お前酔つてるな」と言つて

鈴「セツナしゃま――ワタシ今日一口がんばつました。だから、ナデナデしてくだしゃ――――」

刹「鈴音、わかつたよ今日はよく頑張ったな「ナデナデ」」

「ふや――――――――」と矢口咲たいに
じやれてきた。

刹「ああ、田代ちゃんがなんでしたよ〔ナントナント〕」

甲「えへへへへへへへへ」

刹「さて、これからどうするか」」とこまの状況を考えながら夜空に浮かぶ月を見ていた。

この時、甲斐は武田によつて統一された。そして、武田刹那の名も「甲斐の獅子」として広く知られるよつとなつたのである。

第3章 後編（後書き）

どうでしたか、初合戦の話は自分では頑張ったと思います。
次回の話は刹那君に相棒となるモノが登場します。また、歴史とゲームに無かつた合戦も少し入れおうと思います。また、少し学校習の関係遅くなるかも知れませんが、これからも、がんばるのでよろしくお願いします。

では、また。

第4章（前書き）

ついに帰つて來た――――――！ イヤアーやつと學校が冬休みになつて、バイトも落ち着いてきて書ける時間ができました。では、相変わらずですが第4章みてください、どうぞ――！

あの戦いから、半年、俺たちは戦いで傷ついた甲斐の復興をしてた。

まず、甲斐の道路工事と関所を撤廃した。これにより、他国の商人が入りやすくなり、また、他国情報も入りやすくなる。次に各河川に治水工事をおこなった。

また、俺の指示で河川の合流地点に新しい川の道を作らせた。これにより、川の流れが真っ直ぐになり高い堤防より、安全で何より皆の疲労も費用も低くおさまるし、また、農家には安全に農業用水を送られ

農産物の増加に繋がり近隣住民の民心も掴めるこになつた。

次に治安も悪代官や利権に群がる商人「ブタ」は捕まえ処分し財産没収と国外追放を命じた

また、民の税も下げる。警邏に出る兵には、できりだけ、民に温厚にと徹底させた。

これらの政ごとににより甲斐はこの半年で急速な発展と民の熱い支持がなつた。

さて、俺たちは今、上杉や北陸の進行に備え上野の国を攻略のため、軍備増強をおこなつていたが、問題が発生した。

刹「悪魔の馬が出ただ?」

鈴「はい、そうなんです」

今、俺は部屋で政務をやりながら、鈴音の軍備の状況を聞いてた。

今、我が軍は軍馬補充のため、

「馬狩り」をしていたが、野生の馬たちを捕らえようとした、どこからともかく、多くの馬を引き連れたそれは、大きな馬で、そして、馬狩りに出た者は踏み殺されたり、瀕死の重傷を追つたりする者もいた。そして、その目で威圧された者は動けず自分が乗っていた馬も倒れて泡を吹いてしまつあたりさまだった。馬が無くては戦が出来ぬところのたびその馬打つため軍を出すかと話し合いをして、その話が今、俺のところに来たとゆうわけである。

鈴「いかがいたしましたよか?」と鈴音が聞いてくる俺は、

刹「あつて見たいなー」と言つた。

鈴「はい?」と鈴音はわいついた、

刹「だつてそんなにでかくてなおかつ強力で面白そつた馬だぜひ一度見てみたい」

鈴「みつ見てみたいなんてー相手は悪魔と言われる馬なんですよ、殺されちゃいますよー!」

刹「たとえ、悪魔の馬でも俺はこの田で見てみたい。もし、俺の想像を超える馬なら俺の馬にしたい」

鈴「自分の馬にするなんてーおやめになつた方がいいですー」と反対の声を出した。

刹「でも、俺には必要なんだよ 見てみる俺の団体を!」俺が立てみると日本男子の身長を軽く超える、巨体があり、身長は軽く190cmぐらいであった。

刹「俺はでかいから、並の馬だつと一回で乗り潰してしまつ。だから、その馬が入ればあつと思ひのまま駆け抜けられる」ことができるだろう」と言つと鈴音も觀念したようだ、

鈴「わかりました。これ持つていってください、この紙にその馬が出るところが書いてあります。」と俺にその紙を渡した。

刹「ありがとう、鈴音」

鈴「」うなると刹那さまは止まつませんからね あとで必要な物を持つてきますんで」

刹「わかつた、今からそこに向ひ歸るといへば、いよいよ此へ戻るといへ
くれ」と鈴音の頭を撫でながらそう言った。

鈴「はい、わかりました／＼＼＼＼＼＼」と顔を赤くしてそう言つた。

その後、俺は軽い支度をして紙に書いていた場所に向かい途中に鈴音が必要なものを持ってきてくれてそれを受け取り、その場所でその馬を待つため腰を掛け眠ながら待つことにした。そのまま夜を

朝になり朝日がさす。こう俺の後ろをドンと押す感覚があり、俺はそれを払つたが今度は強く押すもんだからつい「ぐつ」と言つてしまつた。しかたなく、起きそちらに向けると俺は言葉を失つた。

そらこには俺よデカイ馬がいて俺を上から見ていた。また、その毛並みは白銀のように白く蠣は黄金のような色していて、朝日が馬に

射すと体から神秘的なヒカリを放つた。

刹「で・・でかい」・・・「これでも馬か！・・・」

刹「お前かあー 本当に来てくれたのか！ やあーありがとう」と馬に向って頭を下げた。

普通の人から見たらただの変な人と思われるが俺はそれほどまでに嬉しかった。

俺は馬をじっくり見ることにした。

刹「なんて、素晴らしいんだ、お前は！ お前みたいなキレイで神秘的な馬は見たことが無い！」

俺はまるで女を口説くように馬に語りかけた

刹「ほれた！ 心底お前にほれたぞ！・・・」と言い俺は「はははは」
と笑うと馬がこちらに向くと
自分の体を見せるた。そこには傷だらけのからだがあった。

刹那「お前へ傷だらけだなあ お前よっぽど戦さ好きなんだなあ！・・・」

ホラ見ろよと言わんばかりに俺も服の上を脱いで見せた俺も鍛えぬ
かれた体を馬に見せて馬は顔近づけて俺の体を嗅いだ。その鼻息が
くすぐつたつい俺は笑いだしてしまった。

刹「ひやあ―――くすぐつたい」と馬の頭を抑えて一旦離れた。
そのあとは何もすることなく馬は草を食べてた。俺は様子を窺つ
ていた。

刹「怒るかな・・・イヤそこにおこらないよな 俺は本当にお前が
好きなんだ」

馬もこじらひカラと振り向く俺は笑顔で返し馬はまた、草を食べ始めた。

俺はすかさず馬に飛び乗った。馬は驚いたがすぐに田の色を変え暴れ始めた。

俺は離されまいと馬の鬚を掴んだ！

刹「おーおーやるねえ！」と余裕といっていたが段々馬の暴れが激しくなり次の瞬間

刹「うあ————！」馬の暴れに耐え切れず、手を離してしまい吹っ飛ばされるが空中で体制を良くして着地した。でも、馬は仲間を連れまたどこかえと消えていった。

俺はしかたなくまた、寝ることにした。

そして、次の日俺がのきに空を眺めていると急に上か白い物体が迫ってきた俺はすかさず避けて白い正体を見るとなんとあの馬であったのである。だが、昨日と違い馬は怒っていた。

刹「昨日はスマン！辛抱できなかつたんだ」と馬に土下座をした。馬も落ち着いて俺の話を聞いた。

刹「なあ聞いてくれお前も団体がでかい、でかいヤツは嘘をいわないんだ 判るな！だから聞いてくれ俺は本気でお前に惚れたんだ」俺の話が終わると馬は乗れんばかりに俺を待っていた俺は嬉しくなりその馬に飛び乗った昨日と一緒に馬は暴れ始めてまた、俺は吹っ飛ばされた。そんなことが10日も続いたころ、その日だけは馬群れも連れずまた、いつも朝に来るので今日は夜しかも夜空は雲ひとつなく星がたくさんでて月も満月であった

さすがに日がたつにつれてこの馬にも慣れてきたそしてついに馬も暴れるのやめた。

刹「さあ俺のいうこときいてくれ」と馬の腹をけつた
その瞬間馬は地面を思いつきりけりまさに風の「」とくの速さをほこつた。

また、なによりその姿は夜であるのに神秘的に満月がてらしていた。

刹「速い！そして、なんて神秘的に月がお前を照らすんだろう…」

そうだお前の名は神月「しんげつ」

今日からお前は神月だ！！」俺たちは時間を忘れただひたすら走つたそして、日が昇つたところで

家に戻つた最初は皆驚いていたが事情を話すと納得した。

これにより軍備増強はスムーズに進みついに上野を攻略戦が起つた。

敵は我が軍に先手打つため、あえて行軍していたがその時一人の兵士が小山の上に誰かいると指差し敵は全員そちらを向いたそこには刹那と神月がいた。敵はその二人の神秘的な光に心奪われたがすぐそのこころは打ち壊された。

刹「ウオオオオオオオオオオ！」と一気に神月で駆け下りてきたのだ。そして敵の横腹をついていたその時、神月に踏み殺されたり、刹那の斬激を食らつてカラダを真つ二つになる者もいた。敵は突然のことでの混乱しました刹那と神月の突撃により分断させられてしましました。それに乘じるかごとく武田軍が敵の前後と小山から敵目掛けて突撃を駆けてきた。過労じで逃げ延びた兵士たちが城に戻り篠城戦にしようと門を閉めているとズドォン――――と門が思い切り吹き飛ばされて敵では門の下敷きになる者もいた。一体なにごとかと

砂埃が終わるのを待つていると急に周辺に風が起き砂埃を吹っ飛ばした。

その中には剣那と神月がいてその後ろには武田の軍がいた。敵は見えなく城を開けわたした。

この戦いの情報は忍を使い広げ敵に恐怖感を与えて以後次々と敵の城は無血開城をしていった。

そのため上野攻略戦は我が軍の大勝利で終わり以後上野は上杉と北陸の侵攻と防衛に使われるようになり また、剣那と神月の話は全国に広がることになった。

第4章（後書き）

どもです久々にやると何か気分がよくなります今月は学校やらバイトで残業したりして心底疲れてしまい書く力が出ませんでしたが久しぶりに書いて何か気分が良くなつてきました。 次のはしだすが、今度は戦いはお休みで平和な話を書こうとおもいます。
今年中に書ける頑張ります。
では、また、さらば！

第5章（前書き）

マサムネです。今年もあと少しですねー、皆様は「じつ年」を越しますか自分はのんびりとこれをやって、テレビを見ながら年を越します。

では、今回の話は戦いは無しで平和な話を書きます。では、「じつ年

前回の戦いで効果も合って周辺の国は無闇に攻めてくることもなく様子を見みといった感じで、

甲斐は今、日本の本でも有数な国に成長し乱世を忘れる位に平和につた。

鳥たちがチュウチュウと鳴きながら朝の穏やかな時間を堪能しながら刹那は寝ていた。

此処の所、内政など賊の掃除など急がしく、今は死んだように寝ていた。

そん中、襖が開いた。

甲『おはようございます刹那さま・・・ありや、まだ、寝ていましたか？』

襖を開けたのは甲斐姫であった。彼女が来たわけは愛する男とこつに朝駆けに来たわけである。

肝心の本人は田ごろの疲労できずかないでスヤスヤ寝ていた。

甲「ふふ、悪戯しちゃおう／＼」と言つて彼の上に覆いかぶさつた。

甲斐姫の顔の前には今刹那の綺麗な顔があつた。顔の肌は白く女の自分でも羨ましいぐらいであつた。

また、彼にきずかない様に体を触つた。彼の体は極限に鍛え上げられていた。

彼の体を触つていた甲斐姫は

甲「エヘヘヘヘヘヘヘヘ／＼＼＼＼＼＼」と彼に抱きしめられて
いるシーンを想像していた。

そして彼女は極上とも言えるもの、彼の唇にロックオンした。

甲「うへ・・・」
乙「おせんじたためにあります」
甲「なぜか起ります」
乙「なぜか起ります」

そう言って、彼女が唇に近づきそして、

／＼
ついに愛する男とのファーストキスしたのだが、このあと予想もないことが起きた

ガシツ

甲 「んふ？」

彼女の頭を何者かの手が掴み動けなくなつてしまいそして

甲「んむう！？むちゅ・・・ちゅる・・くちゅ・・ちゅ」
驚いてはなれようとしたが頭が押さえつけられ動けなかつた。

手が離れてやつと離れたが気持ちよさで腰が抜けてしまった。

なつた。

肩で息をしながら答える甲斐姫

甲「い、いつから起きてらしたんですか／＼＼＼＼＼

刹「ん？「ふふ悪戯しちゃね」って所からだけど」

甲「結構、前のところからですね・・・」

そつ、彼はもう彼女が入ってきた時点でききていたのだ。だが、あえて彼女には寝ているように見せて観察していた。

刹「ちつて、お仕置きも済んだことだし」

甲「うれしいお仕置きですね／＼／＼／＼

刹「そつかい？それより、起きれるかい？」

甲「ま、まだ腰が抜けてしまつて起きれません。／＼／＼／＼

そんな恥ずかしそうな甲斐姫を見て刹那は。

刹「しかたない。今日は特別だよ」

甲「え？ もやあつ！」

刹那は甲斐姫をお姫様抱っこした

甲「こ、このまま行くんですか！／＼／＼

刹「そつだよ、あんな大胆なことをしたんだ今更恥ずかしがらない、それに甲斐ちゃんの可愛いところも十分に堪能したしね」

甲「／＼／＼／＼！？もう知りません！」
「ふいと横を向いたがその顔はどうかうれしそうだった。

そのあと皆が待つ居間に行つたつみにお姫様抱っこしながらそこにいた鈴音に「私もしてください」とつりやましそうにな

だつてきた。父上、母上、幸村、たちは「今日も平和だなー」と朝のひと時を満喫しながら、朝ごはんを準備をしていた。そして、朝ごはんを済ませた俺たちは父上と母上はようがあるといい出かけて幸村もその護衛でついてくことになつていて。

そして、今、俺、鈴音、甲斐ちゃんと一緒に町に買い物をしにきていた。

鈴音の今の格好はへそだしの和服を上に着て下はスカートを穿いていた。

甲斐ちゃんは『戦国無双3』のお市が着ている服装と同じで色は着物が黄色で帯が水色になっていた。

また、袖の部分には白いフリルが着いていた。

鈴音は俺の左腕につかり、甲斐ちゃんは反対側の腕につかまつていた。

鈴「刹那様ワタシたち似合ひますか？」

甲斐姫も同じような眼差しをしていた。

刹「ああ、二人ともどつても似合ひるよ」と一人とも嬉しそうに顔赤くしていた。

そのあといつしょにいろいろ回つていった。その最周りが俺たちを見ていた「男ども」が俺が一人に分からぬようにそいつ等にメンチを切つて黙らせていた。

そのあと買い物にも一息ついたので近くのお茶屋で休んでいた。

鈴「イヤー平和ですなー」

甲「ホントねー今が乱世とは思えないわんね」

刹「まあな、これも皆が力を合わせて頑張つて甲斐の国を大きくな

つたんだホント感謝しているよ」

俺がそう言うと二人はうれしそうに頷いた。

刹「さてとお茶もすんだことだしいりますか」

二人は「はい！」と言つて今日一日を堪能した。

しかし、乱世はこの平和の時を許さずまた、新しい戦いが待つているだと俺の頭の中だ思つていたがこのみんなの笑顔と居場所を守るために戦うそう心に誓つた。

第5章（後書き）

イヤーついに2010年もあとすこしですが、いかがでしょうかはじめて書いたのですが自分は前々からこいつたものを書きたつたので今年最後に書いて満足です。次回はやっと有名な戦いを書こうとおもいます。では、皆様よいお年を！！

第6章 前編（前書き）

大変遅くなつてすみませんでした。今回の話は武田にとつてとても有名な戦いですうまく書けるか分かりませんが、がんばります。では、どうぞ

刹那たちが一時の安らぎに浸っていた矢先それを壊すことが起きた。

越後の龍動く

越後の上杉が武田の領に進行してきたのである

父上は迅速に兵を動かし上杉軍の迎撃に向った。

後に語られる「川中島の戦い」である。

鈴「あゝあ折角、刹那様と出かける約束がダメになつちやつた（涙）

「

幸「おいおい、そんなことこいつる場合か（汗）」

甲「仕方ないですよ幸村様、「あたしだつて本当は刹那様と一緒に
／＼／＼」

左「これから、戦て時にまして相手はあの軍神・上杉謙信公だつて
のに相変わらずですな、若

刹「ええ、でも、逆にこれなら心配することも減りますよ

ただいま、武田軍は上杉軍迎撃のため行軍しており俺たちは馬に乗
りながら他愛も無い話をしていた。

左「しかし、謙信公はすごいな、最近の情報ではもつと待ち受けたため陣をしいてているとか」

刹「まつたくです、しかし、なぜ謙信公は攻めたと言え我が武田の支城を落としただけでそれ以上攻めず、陣を引いて我が軍を待ち構えているのでしょうか？」

刹「幸村その答えはどうとも簡単だ」

幸「え？」

刹「単純にあの人は父上との戦を楽しみたいだけなのだよ要するに『戦バカ』なんだよあの人は」

幸「い、戦バカってあ、兄上それは言いすぎではないでしょうか（汗）」

左「まあ、その戦バカの人には挑むですからね、くわいりますよ」

刹「ああ、しかも、敵には綾御前「あや」「せん」と直江兼続「なおえかねつぐ」がいるからな」

左「たしか、綾御前は謙信公の実姉であり、また彼女も上杉を治めている一人であり、上杉の女神とか言わされており、上杉の団結力の一つになっている存在とか、しかし、直江兼続とは私でもしりません。」

若「何が知ってるんですか」

刹「ああ、直江兼続、歳は幸村より少し上だな、もともと兼続は村のでだが、小さい時に謙信公に才を見出されて謙信公自慢の軍略と

武を学びまた、綾御前からは国を治める心構えと義と愛の戦を教えてもらい今じゃあ若くして上杉の家老を勤めている程の人物だな」

左「ほう～それほどの人物とは驚きですが、若はいつそんな情報を手に入れたんですか？」

刹「まあ、鈴音に調べてもらつたですよ」

実際この話にはもう一つあり刹那自身が上杉に行き調べて行きそこで、上杉の三人と偶然にも会ってしまいなぜか、気に入れられてしまい、謙信からはなぜかいようなバトルマニア的な眼差しをつけ兼続にも慕われるようになり綾御前からなぜか熱い視線と謙信以上に溺愛されてしまった。

だが、もしこの話が皆に知れられ怒られるのは確かなのだが一番なぜこの話をいえない理由は

我が愛する女性人たちが綾御前の話が出ると自分が危ないからである。

なぜかと言うと綾御前と少し危ないことがあつたのである。この話はまた詳しく話そうと思つ。

刹「そういうえば鈴音俺が頼んどいたことしてもらつたか？」

鈴「はい、『命令どうり戦場の情報と工作は上杉が来る前に済んでいるで氣ずかれております』

刹「そうか、苦労かけるがいつもありがとうな鈴音

鈴「いえいえい／＼＼＼＼＼＼これも刹那さまのためですから／＼＼＼』

そう言ひ鈴音は頬を赤らめたそれがカワイイらしく見え今すぐ頭をナ／＼』

デナデしたいが今馬の上なのでこゝは堪えようその様子を羨ましい
そうに見ている甲斐ちゃんが

甲「そういえば後ろに運でる物つてなんですか刹那様？」

刹「ああ、あれはまだ内緒な物でねまだ教えらないが、この戦の鍵になる物だと言つておくよ」「

甲「この戦で使う物ですか?」

刹「そう、だから、戦が始まるまで秘密何だすまない」

幸一 私たちにも秘密ですか？」

刹 一 そ う だ、 幸 村

今我が軍の後ろから輸送隊の積荷の中にこの戦で鍵となる物は俺と父上ぐらいいしからしいのである。

「——」 鈴「だいじゅーふですよ今回もどーんと私に任せください~」 [ギ]

といつの間にか神月に乗り俺の後ろに抱きついている鈴音がそう言った。

甲「あ――――――? ちよびと鎧笛のこわなー。」

と甲斐ちゅんがそういうて言つてすかさず俺に寄つてきて鈴音とい
い争いになつた。俺はそれを黙つて聞いているしかなかつた。

左「いつか若後ろから切られる時があるじゃないか?」と幸村の方を見る左近

幸「はい、それが私にも心配です「苦笑い」

そんなことがありながら武田軍は川中島に着き陣を敷いてすぐさま軍儀開いた

信「さて、いい加減、謙信と決着をつけんとなさて、敵はどうかね」

左「はい、敵は妻女山に陣を張つております。」「今回の川中島は1と3を半分にし一つにした場所である」

左「今回の策に関しては勘助「かんすけ」殿から話があります。」左近の隣に老将がいたその左目は赤い眼帯をしていたこの方は武田の軍師の山本勘助「やまもとかんすけ」である

勘「はい、今回の戦、敵を山から引きずり出さなければいけません。そこではまず、海津城より別動隊を編成し敵の横突きそして八幡原に誘きだし、そして、本隊で叩く」これぞ啄木鳥の戦法でござりますいかがでしょうかお館様」

信「よし、その手で行こうでは別動隊は剎那・幸村・鈴音とす皆準備をせい!解散!」

と父上が言うとみな準備に入った。

甲「お館様!なんであしは剎那様と一緒にないですかーーー?」と怒涛の勢いで父上に問いただす甲斐ちゃん

信「まあまあお付けそれに関しては剎那の考え方のじや」

甲「えつ剎那様のですか?」

刹「ああ、このことは甲斐ちゃんと左近さん任せたいだ

左「俺もですかい、若？」

刹「ああ、いいかいこれはこの戦を左右することだから、良く聞いてく」

このあと話を聞いた二人は最初は驚いたが直ぐに理解し準備にかかりた。

そのあと自分たちも準備にかかりた。

ここから、俺たちの本当の戦いが今静かに始まらんとしていた。秋の風がただ嵐のしづけのようにただ川中島に吹いていた。

第6章 前編（後書き）

はい、お久しぶりです。そういえばそろそろ、戦国無双3と猛将伝が出ますね、自分は戦国無双3を買つよていです。自分は感激です。

ついに、ps3で戦国ができるのがです「涙」

次回は川中島の戦い後編です。

いつも遅し作品ですかどうぞこれからもよろしくお願いします。
では、やうばです！

第6章 中編（前書き）

おしゃれです。今回は戦闘呼べる戦闘はありません。
しだいさの投稿なので会いかわらずの駄文ですが
本篇をどうぞ

ついに始まった。歴史に名高い川中島合戦、今俺たちは一気に山頂を目指していた。

上杉兵「て、敵がきた、ザシュー「ギャッ！」ザシュー「グワア！」ザシュー「ドワア！」な、なんだ、どうし、グハア！」敵が我が隊に気がついた時に黒い影が一瞬の内に敵を葬った。

鈴「シユタツ！刹那さまの邪魔はさせないよ」影の正体は鈴音だった。後ろから来る部隊が敵に気取られないよう前に敵を殲滅していた。

鈴「さて、そろそろ刹那さまの隊が来るころだけど」そう考えていると後ろから部隊が見え、鈴音は当たりそうになる寸前にジャンプして先頭にいた刹那の愛馬・神月の後ろに背中合わせの状態で乗った。

刹「ご苦労さんで敵はどりだ」

鈴「はー、この先の我が軍の進路にいた、敵は本陣付近以外は全て討ちました。」

刹「よし、これ以上の敵撃破はもういいだろ？、これより我が隊は一気に山頂を目指す！」

俺がそう言つと速度を上げたその隣いた、幸村が

幸「ここまでは手筈どりですね兄上」

刹「ああ、そうだな、幸村俺はこの戦いが一つの転換期だと俺は思んだ。」

幸「転換期ですか？」

刹「この戦に勝つにせよ負けるにせよこれから関東に大きく影響が訪れるだろう」

幸「そうですか、しかし、勝つののは武田と私は思います！」

鈴「あたしも、もち、幸村さまと同じ考え方です」

刹「そうだ、この戦に勝ち一刻も早く関東を沈めるだ」

幸・鈴「はっ！（はーーー）」

武田兵「刹那さまもうすぐ敵本陣に着きます！」

刹「よしー全員このままの本陣に突っ込むぞ！」

そして、敵本陣に突っ込んだ俺たちが見た物は・・・・・・

敵兵が人一人以内ただの無人の敵本陣であった。

幸「これは、兄上やはり」と俺に聞いてく幸村。

やはり、敵は啄木鳥戦法を見破っていたかさすがは、謙信公だが、これだけ啄木鳥の口ばしは折れませんよ

刹「ああー」と俺はピィィィィイーーーーと口笛を吹いた。すると、

バアサと一匹の鷹が飛んできた。そして、俺の腕に止まつた。そして、鷹の足にある小さい筒入れに手紙をいれた。

刹「これを見届けた俺は既に指示をした。それを見届けた俺は既に指示をした。

刹「これより啄木鳥戦法から裏啄木鳥戦法にしてやるよくな！」

全「…………」

さて戦はこれからだ。

信玄 S.H.D.E

ワシは今本陣で左近と甲斐姫と謙信が来るのを待っていた。

左「今頃、若の隊が山頂に着いたにじやないですか？」

信「ああ、じゅうなこのあと何にも無ければ楽ができるじやがな
ない～」

甲「変なこと言わないでください。お館様」

信「グハハハハア、イヤイヤすまんなつ」とワシが甲斐姫に謝ると話題を変えて見た。

信「ところで甲斐姫は刹那とはどままで進んだかね？」

甲「な、なななに言つてゐるですか、お館さまー?／＼／＼／＼／＼」と
顔を赤らめて声をあらげて言つた。

信「いや、なに結構うまくいつてゐるから少し聞たかつたんじゃ」

甲「いや、まだ、そ、その、け、結構うまくこつてますよ／＼／＼／＼／＼」

「
顔赤らめてやつ言つた。うん、かわいいの」

信「そうか、そうか、これなら速くうちに孫の顔が見れそうじゃな

甲「ま、孫つて、もう! お館様!」

ワシと左近は大笑いしてしまった。じゃが、こういた若者の人生は
一番大切じゃ、しかし、今は戦国の時代こういった。若者たちを戦
いにだしてしまはう、まったく自分の無力さにあきれてしまはうよ

左「信玄公、大丈夫ですよ」そう考へていると左近がなにかを感じ
たのかそう声をかけてきた

左「若が言つてました。『この道は自分で選んだことそして俺は生
きて未来を作るために俺は戦うんだ。それに、家族が苦しんでると
こりは見たくないです』って前に言つておりましたよ

まったくワシは幸せ者じゃこんなにも息子に愛されているとは、し
かし、刹那はものすごく成長した。武力・知略も間違いなく日本の本
でも上にあるじやうつな、だが、一番なのは心の力が強くなつたと
思つのう

信「どうか、刹那がそんなことをそんじやワシも頑張つてみようか
ね、おことたちの未来のために」

左・甲「「はい！」』

二人が返事をすると空から一匹の鷹が降りてきた。足には小さい手紙があつた。ワシはその手紙を取り鷹にはお礼として生肉をくれた。鷹はうれしそうに食べていた。ワシはその手紙を見て目の中の色を変えた。

左「どうしました。信玄公？」

ワシは無言で手紙を左近に渡した。

左「失礼します。！？」、『いつは、若の読みあたりましたね。

甲「え、てことは…？」

信「うむ、これより全軍、啄木鳥戦法から裏啄木鳥戦法に変更する。皆、準備にかかり！」

左・甲「「はい！」』

それであの戦好きを叩いて見よつかね

信玄 side out

第6章 中編（後書き）

戦国無双3 Zは、やつぱりおもしろいです。ガラシヤかわいいよガラシヤ、そういうええ、そろそろ三国無双6が発売されますね私も断然買います。次回ですが川中島の戦い後編です。では、次回までさらば！

第6章 後編（前書き）

お待たせいたしました。川中島の戦いのリストです。
今回はキャラ崩壊と新キャラがでます。では、どうぞ

左近 side

俺と甲斐姫は若が送ってきた手紙に従いある準備をしていた。

左「しかし、まさか、こんな物を作っていたとは若には恐れ入りますよ」

俺は始めてそれを見た時、頭が真っ白になりかけた。

なぜ、こんな物があるのかと思いましたよ。だが、これで敵の足並みをぐずせる。そうすれば、この戦の勝機はこちらに傾くだろう、しかも、こいつの短所といえる部分を補うように手を考えていたとは、若に驚されましたよ。

左「まあ、これがうちの作戦通りに行かないと意味無いんだけどね」

甲「もう、左近さんそんな縁起でもない」と、言わないでくださいよ刹那さまや皆で力を合わせてここまでやったんですから。」

左「ああ、わかつてゐよ、しかし、今回えらい氣合が入つてじやないか？」

そう、甲斐姫や鈴音は今回の戦に妙に氣合が入つていた。

甲「いや、何か今回の戦はどうしても勝たないと刹那様に危険が及ぶと思うんですよ。」

と語つとなんか背後に毘沙門天の化身見たいなのが一瞬見えた気が

した。

しかし、また、若がらみですか、これが出来ると必ずややこじれことになるですね。

いつか、若が後ろから刺されないよ祈つとれますか、

左「そんじゃ、さつあと準備にかかりますか、左近隊はこれより若の指示通りに準備をする! 甲斐姫隊

も準備にかかりれ!」

甲「わかりました。皆、いくわよ!」

兵「『『『『ハツ!』』』』

さて、これからだ、若や皆の歩みが進むか此処で終わるかどうかの大博打の幕開けですは。

左近 side out

秋深まるこの八幡原に白き霧が出ていたその中に白き鎧の集団がいました。

そう、この集団は上杉軍の先鋒そのものである。

上杉兵「隊長」のまま行けばあと少しで武田が待っているところに着きますね」

上杉将「ああ、皆、再度、装備の点検を霧が晴れかけて来たら先手を打つぞ」

上杉兵「しかし、隊長、大丈夫何すかね、相手は甲斐の虎とその息子で甲斐の獅子って言われる人物たちなんでしょう」

上杉将「まあ、そうだが、そんなこと考えてもしかたないだろ。俺たちはただ、謙信様たちを信じるだけだ、ほら、さつさと準備を急げ」

上杉兵「「「ハッ！」」」

そんなことをしているうちに伝令が入った。

伝令兵「報告！まもなく、霧が晴れかけてきました。」

上杉将「よし、これより武田の先手を打つ、行くぞ！」

上杉兵『『『オオオオオッ！』』』と上杉軍の先鋒は真っ直ぐ武田軍の陣へ向った。

このとき先手を打つたと上杉軍先鋒は誰もが思つたが・・・

「ズドーンー！」と静寂を破るような雷鳴の如き轟音が鳴り響いた。

破局は突然來たのだ。

刹那 side

「ズドォンー！」と轟音が鳴り響くと森が揺れ木に止まっていた鳥たちも騒ぎ始めた。

幸「兄上これは」

刹「ああ、俺たちも急ぐぞ！」

全「『』『』『』オオツー！」

鈴「ガツテンでい！、刹那さま私がんばりますよ！」

鈴音は氣合よく答えた。

刹「偉く氣合が入ってるな、どうしたんだ？」

鈴「はい、何か女の勘見たいのものがこの戦は何か刹那さまに何か起これりそうな気がするんです よ？」

刹「そうなのか？まあ、俺も氣つけるが鈴音も頑張りすぎで無理をするなよ。」

鈴「はい！わかりました 」

刹「よし、みなこのまま、一気にこぐわハ幡原に出る合図は左近の隊の攻撃終了後に突っ込むぞ！」

全「『』『』『』ハツー！」

刹那 side out

左近 side

左「よし、敵の足を扱けさせたな急いで、玉を込めろ!」

武田兵「ハツ!」

左「連弩隊構え、敵に休む暇を与えるな!」

武田兵「ハツ!」そう言つとクロスボウより少し大きめの物を持った兵士たちが一斉に向かい矢を撃つた。

そうこの戦で若が俺に託した物は三国志で希代の名軍師と言われた。諸葛孔明が作つたと言われる。

「連弩」を若が改良し装弾数を倍増しており、また、威力も当たりがよければ鎧を着た兵士を貫通するほどの威力になつた。だが、これは、あくまで、本命の武器を使う時間稼ぎである。

武田兵「左近様、玉、装填完了です!」

左「よし! 鉄砲隊構え!」そう言い放つと陣の前に設置した。3つの柵に入る鉄砲を持つた兵士たちが一斉に構える。そう、これこそ、若がこの戦を決める切り札「鉄砲」である。

作戦はこうだ、まず若たちの部隊が妻女山に行き敵が入なければ敵にけどられないよう鷹を使い本隊にしらせる。そして、敵が八幡原に来たら鉄砲と連弩の交代撃ちで敵の出鼻をくずき、そこを甲斐姫率いる伏兵が左右から敵に攻撃をかけそして別働隊がそこに加わり

一気に決着をつける。

敵も俺たちの裏をかいだと思ったが結局はそれにまたこつち
が裏をかいしたことにより啄木鳥戦法は成功に道びいた。これぞ、裏
啄木鳥戦法である。

左「撃て——！」

ズドーン！とまた鉄砲が火を噴いた。

上杉兵1「ぐあつ！」

上杉兵2「ぎやつ！」

上杉兵3「ぐわっ！」と鉄砲の餌食になる上杉兵そして、玉を込める間を連弩と柵で食い止めて玉を込めえた鉄砲で撃つそれお繰り返し鉄砲を5発撃つたところで打ち方をやめさせた。

左「撃ち方やめい！伏兵に合図のホラ貝をふけい！」
とホラ貝が吹くと左右から伏兵が混乱になつてゐる敵に切り込んだ。

左「俺たちも行くぜ！ 続けえ！」

そう言って俺たちも敵に突っ込んだ。

左近 side out

俺たちが急いで馬を走らせそしてやつと山を下山し八幡原に着きをして、敵の背後を突いて

上杉兵「ほ、報告！て、敵の援軍が我が軍の背後からきました。」

上杉将「な、なにを！ 小童が返り討ちにしてくれん！」

俺は兵士の伝令を馬で聞いてる敵将に突っ込んだ。

刹「そこの将！ 俺と勝負せい！」 俺はすかさず武器をだした。

上杉将「な、なにを！ 小童が返り討ちにしてくれん！」

将も俺に気をつきすぎかさず俺突っ込んだ。だが勝負は一瞬で決まった。

俺はその敵将の刀を獅子輝剣で折りそのまま将の胴体を切り胴体が半分になつた。

刹「敵将、この武田刹那が討ち取つた――！」

そしてそこから乱戦に突入したが形成はこぢらに傾いてた。だが、少し可笑しいことがあつた。

刹「幸村いたか！」

幸「いえ、どこにも謙信公らしき人物は見当たりません。」

俺と幸村で敵を駆逐してた。

幸村の槍が電光石火の如く敵を突きあるときは切り裂いていた。俺も切つたりぶつ飛ばしたりしりして、敵兵の腕や足があり得ないほうに曲がつたりしていた。

刹「しかし、どうしてだ？なぜ、謙信公もいないがあの二人もいないんだ。」

そう考えてみると鈴音が慌てたようすで報告にきた。

鈴「報告します！ 海？ 城に敵襲であります！」

幸「なに…どこの敵部隊だ？」

鈴「はい、それが」

伝令兵「報告敵の援軍が善光寺からきました。」

刹「なにー」と俺も驚いたまさか、ここでも歴史がかわっているとは、そう考へていると
急に一人の若武者が来た。その人物は

刹「兼続か……』

兼「おおー!」これは、先生こんなところひで念つとは、
そつ、この頭の兜に大きく「愛」と着けて鎧の背中にも「愛」が描
かれておりやや落ち着いた渋みのある声をする若武者「いや
若き家老」直江兼続「なおえかねつぐ」である。

刹「ひせしふりだな兼続!元氣でいたか?」

兼「はい!先生や謙信公を超えてひと口々励んであります。」

刹「そうか、やはり、海津城の奇襲してゐる将は

兼「はい、謙信公であります。」

やはりか、まさか、このような大胆勝つ危険な方法で來るとは、
この戦は左近さん甲斐ちゃんの部隊が本命のため父上の部隊は少な
くなつており、また、国内の警戒も少し手薄な所が出てしまつた。
多分そこを突かれたんだろ?」

刹「まあ、再会は嬉しいのだが俺はこれから忙しいだ悪いが行かせて
もらひづか」と神戸で父上の救援に向あつとした。

兼「すみませんが先生！あなたを謙信公のもとえ行かせるわけには行きません！」と兼続は自分の武器「伏鬼兼光」「ふしきかねみつ」と一緒に持っていた護符を俺に向け投げその護符が変形し鋭い矢になり俺を狙ってきたが、

幸「炎よ！」すかさず幸村が文字力で炎を纏った紅牙飛燕ふり護符を全て焼き尽くした。

幸「兄上ここは私にお任せよ！早くお館様のもとえ！」

刹「わかった。ここは任せたぞ幸村！」俺は神月を走らせた。

兼「くつ！行かせはしませんぞ。」と兼続が行くが幸村がそれを阻む

幸「ここはからは一歩もとうしわしない！ 真田幸村まいる！」

兼「ならば、押し通るまでよ！ 直江兼続まいる！」

若き一人のもののふがぶつかった。

俺は神月を走らせ武田本陣に入ろうとしてた。海津城に行くためにはここを行かなければならない。
そうしているうちに本陣に入った。だが、本陣の中には一人の女性が立っていた。

神秘的な美しさを放ち純白の着物がまた、神秘的な美しさを引き立てて足もとは黒のロングブーツを履いており髪形は昔ながらの垂髪でその上にフード被っている。また、肌も雪の如く白く顔も整つておりその顔から出る笑みは俺に向っていた。

この女性こそ上杉の女神、謙信の姉「綾御前」[あやびわせん]

俺は神月を止めた。

刹「あ、いえ、御前様お久しぶりです。」と降りて挨拶をした。これは避けては通れないと思つたのである。だが、俺の挨拶がいけなかつたのか顔は少し残ねそうな顔をしていた。

綾「刹那、御前様とそんな硬くな言い方は入りません。いつものよう
うに綾と読んでください。」

少し涙田にもなっていった。

刹「わ、わかりました。では、綾さんお久しぶりです。お元気そうで何よりです。」言い直し笑顔を向けながらいった。

綾「ああ！やはり、貴方の笑顔は眩しすぎます／＼／＼／＼」と誰が見ても真っ赤な顔していて、少しふらつきが見えた。

刹「綾さんがここにくるとこいつ」とは俺の止めですか？」

綾「それもありますが、一番は可愛い刹那を見たいと思い待つておりました。／＼＼＼＼＼

刹「か、可愛いつて、俺なかより、ずっと綾さんの方が可愛いし綺麗ですよ」

綾「まあまあまあ／＼／＼／＼」と両手を真つ赤になつた顔につけて、腰振つていた。

俺が上杉でお世話をなつた時はすぐ綾さんにお世話になつたが、ただ、少し、いや結構行きすぎなどいひもあつた。その話は後々話

そう。そう考へていると綾さんがトロップから復活していた。

綾「あなたの一言一言でこんなにも私の心は乱されてしまつなんて
／＼／＼「
まだ、自分に酔いしれているなと思つていると綾さんはとんでもな
いことを言いだした。

綾「やはり、貴方と私は結婚して夫婦になる運命なんでは／＼／
／＼「

俺はズッコケかけたが何とか踏ん張りツッコミを入れた。

刹「い、いや綾さん別にそんな「ちよつと待つた――・?」『』
ヒビにから出てきたのか鈴音と甲斐ちゃんがてきた。

甲「なんのよあんたはあんた見たいな自分の世界に入るヤツに刹
那様はゼ―――ついたわたさにからね！」

鈴「そうだよ、それに表ではそつだけど裏じゃこわーい人に刹那さまと夫婦になる資格なんてありませんよーだ」

綾「うるたえ者たちよ刹那はそれを含めて私を受け入れてくれた。
大器ある人物です。あなたたちのような小娘どもには勿体では
鈴・甲「何ですつて――！」と三人に何かオーラのよな巨大な
力を感じて体が思うように動けなかつた。

甲「刹那様こいつの相手は私たちに任せくださいー」

鈴「そうです！刹那さまは速くお館様のもとへー」

刹「あ、ああ、わかつた！」」」わ任したが無理はあるなよ。」

鈴・甲「「はい！」」俺は神月に飛び乗つて走らせた。

綾「ああ、刹那！」

刹「綾さん！また、ゆつくじと話でもしまようね！」と俺は城を因指した。

綾「あなたたちがこなければ刹那の愛を堪能できたものをここで倒して差し上げましょ。」

甲「それはこっちも同じじや———。」

鈴「ここでアンタを倒して刹那様に近づけないよにしたあげる。」
ここから、三人の恋する乙女の熾烈な激戦が始まった。

刹「まさか、嫌な予感とはこれとは、あとで詰め合わせを考えないとな、だが、今は父上を助ける方が先決だ。」と神月の速度を上げたそして、城に着いて見たものは馬に乗った謙信公の七支刀の姫鶴一文字「ひめづすいちもんじ」を振りかざし父上が軍配風林火山・序「ふうりんかざん・じょ」で受け止めがぶつと飛んでしまい、そこを謙信が見過ごすはずも無くすぐさま父上に斬りかかった。

刹「父上！」俺は獅子輝剣を謙信の姫鶴一文字にぶつけその反動で獅子輝剣が俺の手元に戻った。

そして、神用から飛び降り父上の前にたつた。

刹「父上いか無事で?』

信「ああ、いや、息子に『かつこわることこの見せちやつたね。』
そつ言つて風林火山をとつた。

謙「刹那、久しいな」

刹「はい、お久しぶりです謙信公」

謙「姉上には会つたか?」

刹「はい、相変わらずでしたけどね。」

謙「そうか」と表情を変えずに答えた。今の謙信の戦国無双3の格
好をしていた。

刹「どうしますか?これから一戦やりますか?」

謙「否、今日はここまでとしよう宿敵と刹那の軍略はまさに美酒の
美酒であった。また、ちそになるぞ、ハツ!」と馬を走らせ謙信は
後退した。

信「やれやれ、まだ、足りないといふかね。ワシたちもつむ腹いつ
ぱいなんだけどね。

刹「まつたくですよ」

その後上杉軍は撤退をした。その後俺たちは海津城に集まつた。

信「皆、今回の戦大儀であった。これでつむさい謙信も少し黙っているじやろな」

左「まつたくですよ、しかし、今回は若の軍略とあの兵器、一体どこで鉄砲なんて作り方しつたんですか？」

刹「まあ、ちょっと知り合いに鉄砲に詳しいヤツがいてそいつからおさわりました。」

左「そうなんですか、じゃーあそこでなんかあやばい雰囲気をだしている一人はどうなですか？」「汗」

その一人とは鈴音と甲斐ちゃんである。二人は綾さんと激闘の末引き分けに終わった。また、一人の武器もボロボロでまた、俺が見たとき服もボロボロに近いものになつており、

もともと一人の服は露出度がある服のため胸の全体が見えそうだったので俺は一人に半纏を一つ着せた。今はもう新しい服に着ている。

刹「とりあえず、ここからですよ俺たちの新しい時代が来るか来ないは」

そう言つうと歎頷いた。この戦いを気に武田の怒濤の快進撃が始まることを誰もが予測していた。

ただ今は秋風が川中島の戦いの終わりを告げるよつに穏やか吹いていた。

第6章 後編（後書き）

どもーです。やつと川中島の戦い編完結です
ここまで書くのに苦労したぜ
次回は新キャラと自分が考えたオリジナルの話になります。
では、またあいましょう。

主人公設定（前書き）

遅いが設定でーす

主人公設定

武田刹那「タケダセツナ」

身長・190cm

容態・髪の毛の色は金色。瞳の色は青で美形

性格・明るく・家族や仲間思いで頼れる兄貴分

武田信玄の息子で転生者である。なぜ転生したかは不明ただ昔から歴史などが好きで特に戦国時代が一番好きで転生前に戦国無双シリーズや信長の野望シリーズをやっていてその知識で戦国武将のことや歴史のい流れは大体分かっている。また身体能力は転生前と変わらず。巷では「武田の麒麟児」と言われる
また、幸村・鈴音「くのいち」・甲斐姫とは幼馴染で幸村とは義兄弟の契りを結んでいる。

強さは本多忠勝より上。知略は名だたる知将たちと同じくらいである。またその美形で女性を軽く落としてしまつことがしばしばある。

主人公設定（後書き）

最近、戦国3をやって書きたくなつた気まぐれ作者。ただいま本編作成中です。

第7章前編（前書き）

久しぶりに書きたくなってしまった。自分がいた。
今回は一人無双武将が出ます。では開幕！

川中島の合戦から約半年、この間大きな戦も無く武田は内政に力を入れ来るべき時に備え国力を高めていた。そんな中尾張を収める。巷では「尾張のうつけ」と言われる。織田信長が美濃に侵攻しこれに成功と一気に力をつけ、奥州では「独眼龍」と異名を唱える伊達政宗が頭角を現してきた。戦乱は新たな兆しを見せていた。

刹那 side

ミンミンミンミン・・・・・

刹那「ああ～何でこんなに糞アツいんだよ」と愚痴る俺、今俺は一人山奥で森の中にいる。

ここ最近、反武田の残党が武田領を脅かしていた。俺は鈴音に調査させてやつらの拠点を見つけ俺が討伐に乗り出した。何故俺だけなのかと言つと鈴音の調査でその拠点の位置が徳川領の近くにあるため、軍を動かせば無用な争いを起こしてしまう。ホントは幸村・鈴音・左近さん・甲斐ちゃんたちを連れてくれば良かつたが、幸村と左近さんは上杉と奥州の備えで上田城に行つている。鈴音は情報収集のため武田を出ている。甲斐ちゃんは里帰りで入ないましてや父上を連れて行くわけにも行かない。だから、自動的に俺だけで行くことになった。

刹那「まあ相手は残党と言つても数は少ないし何とかなるだろ」「残党自体それほどの数ではないのは分かっている。それに試したい物もあるからな。

刹那「しつかしこの暑さどうにかならないかね?」と今の俺は何時もの服装に腰に獅子丸に挿し

日差しが強いので編み笠を深々とかぶついて外からでは顔が見えない状態だった。

刹那「でも、今の俺って十分怪しいじゃないの？」刹那の身長は一般的の男性よりもでかく体格もいい。でも、今は顔も見えず増してやこんな山奥にいること時点でも怪しい。

刹那「これで襲われても文句言えないなあ」と思つていると後ろに殺氣を感じ振り向くと矢が三本が飛んできた。俺は三本とも右手刀で叩き落とした。そして矢が飛んできた方を見ると『』を構えている。美しい女性がいた。

? ? ? side

私は今、単身賊の討伐のため山奥にいます。私が仕えてる徳川領を最近賊が脅かしているからです。

でも、賊のアジトは分かつたのですが、そのアジトがあの武田領に近いため討伐軍が出せないので。

そこで、私自ら志願しました。父上や殿や民のためにも頑張らなくてわ！

? ? ? 「でも、正々堂々と正面から行きたいけど私は一人相手は多數、やはり、どこかで待ち伏せして、大将を討つしかないわね。」と算段を考えていた。私

? ? ? 「でも・・・今日は一段と暑いわね・・・」と夏の日差しが私に突き刺さり、汗が止まらない。

その汗も私の胸の谷間におちつて！

????「わ・・私はなんて事見てるいのーーーーふ・・ふ・
不埒です！／＼／＼／＼もつと精進しなければと考えていると近くから微かに人の気配と声がしてきた。私は急いで茂みの中に隠れないと編み笠を深く被つて赤を強調した服装をして腰に立派ね刀を差している大男が来た。

????「あの男いかにも怪しいわね。さてはー賊の者！」と巡回している賊の者だと私は判断した。

????「まだこちらに気付いていないみたいね。」ならばと私は弓に一気に三本の矢を引いて男に定めた。そして男の背中に狙いを定めて瞬間矢を放った。見る見る矢は男に向った。これは仕留めたかと思ったが、行き成り男が後ろを振り向き右手刀で矢を折った。

????「わ・・私の矢を落とすなんて！？あの男出来る！でも私はこんな所で負けません！」と私は男に向つて走りながら矢を連射した。男は腰の刀を抜き矢を全て叩き斬つていった。男の間合いに入つた途端男は鋭い突きをしてきたが私は背を向けかわしそのまま、体をひねつて男の肩を台にして、至近距離で矢を放とうとした。

????「これで終わりです！」

刹那「終われるかよ！」と男は思い切り体ひねつて私を振り落とそうとした。体制が崩れ掛けた時に矢が放たれて男の笠を吹つ飛ばした。私は宙返りして飛び退いた。

お互い一瞬、接吻しそうな距離で一人は見つめあつた。その時だけ時間が止まつた。

？？？「なんてキレイな瞳でしょう」私は男の青空の如く神秘的の瞳に見とれてしまった。

刹那 side

刹那「い・・いきなりってのは無しだろ。」今先思つたことが現実に起きたとは心臓に悪い

しかも、ここで本多忠勝「ホンダタダカツ」の娘、稻姫「イナヒメ」と出くわすとは思わなかつたぜ。

すると、稻姫と俺は少し距離をとつた。稻姫の頬が少し赤いのが見えた。すると、肩膝をついて稻姫が口を開いた。

稻姫「失礼ながら！私は徳川家臣で本多忠勝が娘、稻とります。あの貴方様は腕並みの物ではありません。何処かの将でしょうか？」

ほおーあの少ない討ち合いで俺を将と見抜くとは中々の洞察力だ。
俺も返せねばな。

刹那「俺は武田が将武田刹那つてんだよ！」と俺が答えると。

稻姫「すつ

刹那「すつ？」

稻姫「すいませんでした！見た感じが怪しかったのですから賊と間違えてしまいましてやあの有名な甲斐の獅子と呼ばれる。武田殿に矢を向けたこと真に申し訳ありません！」と土下座をしながら誤つてきた。

刹那「いやいや、そんなに誤らなくつていいから」と俺は答える。

稻姫「で・・ですが」と顔を上げて涙目を見せる稻姫それを見て少しドキッ!としてしまう俺。

刹那「気にするなつて、それにあの噂に聞く徳川の美しき姫武者の稻姫殿に会えるとは幸運だ。」と俺は言った。

稻姫「う・・美しいなんてそんな//」と顔赤らめた。

刹那「可愛いなあ」と俺は無意識に稻姫の頭を撫でていた。

稻姫「え・・あ・・あのー何故頭を撫でるのですか?//」

刹那「いやーすまないこれは癖でな稻姫殿が可愛いかつたから撫でたくなつた。」

稻姫「か・・可愛いなんてもうふ・・不埒です!」と言いつが撫での拒まなかつた。

俺はそれを見てつい笑つてしまつた。そのあと先ほど緊迫した空気から和やかな空気に変わつた。

それから、少したち稻姫が口を開いた。

稻姫「武田殿。重ねての無礼を承知でお願いがあります」

稻姫「どうか民を苦しめる賊討伐に力を貸してもらえませんでしょうか?」稻姫は真つ直ぐな瞳で俺に言った。

刹那「ああいぜ、これも何かの縁、力を貸しましょ!」

稻姫「ありがとうございます！では道中よろしくお願ひします。」

刹那「やっぱ、良い笑顔するわ」それから俺達は賊討伐のために一緒に行くことになった。

稻ちゃんやつぱ可愛いや、では次回で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2376p/>

戦国無双 甲斐の獅子

2011年11月23日09時46分発行